

喫茶文化の発展に京都・宇治・山城が果たした役割を整理

時代	時代背景	喫茶文化の発展	資産候補
平安時代	煎茶法(煮茶法)が伝わる	喫茶の始まり 寺院社会・貴族社会に展開	
鎌倉時代	栄西が点茶法を紹介する 梶尾、宇治で茶の栽培開始	武家社会に展開	
南北朝時代			
室町時代	宇治茶が梶尾茶とともに天皇や将軍が愛飲するトップブランド茶となる	庶民にまで展開	
(戦国時代)	覆下茶園の出現	茶の湯の登場	
		日本特有の抹茶の出現	てん茶(抹茶) 覆下茶園(てん茶)
安土桃山時代	信長、秀吉 茶師を庇護	茶の湯が各階層で展開	
	千利休による「わび茶」が確立 茶室、庭園と一体となり進展	茶の湯が確立	茶室、社寺(茶道)
	千利休の茶の湯を宇治の茶師が支える		茶師の屋敷
江戸時代	ロドリゲスが日本協会史に宇治茶のことを記載		
	御茶壺道中始まる(宇治の茶師が担う) 商品価値		
	家元制度ができる(茶の湯が茶道として深化を見る)		
	ケンペル『日本誌』に宇治茶のことを記載		
(中期)	隠元が急須で茶を入れる淹茶法を伝える(釜炒りの煎茶)		
	売茶翁が文人や知識人に煎茶趣味が流行するきっかけをつくる		
	永谷宗円 青製煎茶製法を発明	煎茶(揉茶)の出現	揉茶(煎茶) 露天茶園
	江戸で煎茶 大流行		
	青製煎茶製法(宇治製法) 全国に広まる(現在の日本茶の製法の主流)	煎茶(揉茶)が庶民に展開	茶室、社寺(煎茶道)
(後期)	宇治で玉露製法が発明 商品価値	玉露(揉茶)の出現	揉茶(玉露) 覆下茶園(玉露)
明治時代	宇治茶、花形輸出商品として外貨獲得に貢献 (茶問屋が輸出発信基地)		茶問屋の町並み
	山なり茶園開墾		露天茶園(山なり茶園)
	女子教育の一環に茶道が取り入れられる	茶の湯が女性にも展開	
天正			
昭和	外国の賓客に茶道家元等が抹茶をふるまう	茶道が日本を代表する伝統文化とみなされる。	